

修学支援に難渋し退学後、就労移行支援事業所との連携を経て バイト先へ正社員として就職し自分らしく働いている成功例

○稲葉 政徳（岐阜保健大学短期大学部 リハビリテーション学科理学療法学専攻 講師）

1 背景と目的

医療専門職者を養成する大学や専門学校等は、就職活動での困難さに直面するケースは少ない。しかし、専門科目の膨大な学習内容から入学直後から修学面でつまづく学生は一定数存在する。とくに理学療法士や看護師などの3年制医療専門職養成校の場合は、臨床実習期間が修業年限の1/6を占めることから基礎応用力のみでなく、コミュニケーション能力やレポート作成などでのパソコン（以下「PC」という。）作業技能など多様なスキルが求められる¹⁾。

今回は、学業不振から本学を退学後にバイト先にて正社員として採用された未診断20代男性を成功例として紹介する。大学入学時からアルバイト経験があったこと、2年時に就労移行支援事業所（以下「事業所」という。）内で開催されていたキャリア支援プログラム（以下「キャリアプロ」という。）に参加していたことが退学後に正社員としての就職へと円滑につながった。本対象者のケースを通して、「大学と就労移行支援事業所」との連携のヒントにすることを実践発表の目的とした。

2 方法

(1) 調査の流れ

在学時の対象者へのアンケート、面談記録、SNS上での記録のほか、退学後には対象者本人への月1回のインタビューなどをもとに考察した。

(2) 倫理的配慮

倫理的配慮について、まずは本研究の趣旨を口頭にて十分に説明し同意を得たうえで、発表の際に個人が特定されないことを伝えた。さらに回答の可否により個人の不利益が生じることはないこと、回答の途中で辞退できることを伝えた。

(3) 調査対象者と概要

20代男性。未診断。高校3年次に担任の勧めで指定校推薦にて本学理学療法学専攻に入学した。入学直後から修学面では全般的に成績低迷しており、コミュニケーション面の困難さ、PC作業の苦手さなどが認められたため、筆者が本人へA事業所内で実施しているキャリアプロの受講を本人へ勧めたが当初は「必要が感じられない」と拒否した。その後成績が振るわないものの2年生に進学できたが、さらに学習の困難さは続き、ゼミ担当者である筆者の勧めに

よりA事業所のキャリアプロを受講。2年次後期では学習の困難さが露呈。その流れで年度末の学内評価実習では、本人と連日オンラインにて、視覚情報を優先した指導、メタ認知を意識させた問いかけなどを意識しながら修学支援を行った。当初課題をこなしてはいたが、徐々に期限内に仕上げるができなくなり、次第に連絡が取れなくなるなど回避行動が目立ち、提出物は滞るようになった。その後の再試験結果でも大半が不合格となり、3年次への進級に必要な課題は山積していた。しばらくして登校し、学内にて課題に取り組んでいたが、本人の気力の無さから担任に伝え急遽三者面談を実施し、退学を決意した。筆者は即座に本人の居住地に近いB事業所と連絡しスタッフから面談、助言をいただく。その後アルバイト先へ正社員として採用され、現在は困難さを自覚しながらもやりがいを感じながら自分らしく働いている。

3 支援経過と結果

(1) 対象者の1年時のアンケート調査から

2019年度にA事業所による「キャリアプロinカレッジ」にて本学で講義が行われた。その際に実施された「働く準備チェックシート」（4件法）のうち、「できない」、「あまりできない」と回答したものは以下の通りだった（表1）。本人への退学後の振り返りインタビューから、現職場にて、同僚との対人スキルを含むコミュニケーション面の苦手さのほか、自分は「地味な仕事が向いている」ことに気が付くようになったと述べていた。このことから入学前後より対人スキルを含むコミュニケーション面のみでなく、自己理解をはじめ、全般的にサポートが必要な課題があったことがわかった。また、本人はビジネススキル面のうち当初からパソコンスキルの苦手さを自覚していたが、現在では他者への報告・連絡・相談、職場への順応性、指示理解などの困難さも自覚するようになってきている。

その他、同時に行った坂野・東條らの一般性セルフ・エフィカシー（GSES）は16点中2点であり、5段階の中で「非常に低い」という結果であった。なお、遠隔で実施しようとした自閉症スペクトラム指数では、「忘れました」「忘れてしまうので今すぐ回答します」と言いながら返送されることはなかったため未実施。

表1 働く準備チェックシート

あまりできない	できない
<p>【基礎的日常生活】 日常生活のリズム、健康管理、時間の遵守、体力、余暇の過ごし方(5/14問)</p> <p>【自己管理】 向上心、忍耐力、集中力、感覚過敏、こだわり、変化への対応、衝動性(7/13問)</p> <p>【コミュニケーション】 話の内容の理解、適切な会話(2/14問)</p> <p>【自己理解】 趣味・特技、性格・特徴、柔軟な考え方、客観性(4/10)</p> <p>【ビジネススキル】 主体性、指示理解、判断力、協調性(4/15問)</p>	<p>【基礎的日常生活】 電話対応、金銭管理(2/14問)</p> <p>【自己管理】 ストレス対処、積極性、記憶力、先の見通し(4/13問)</p> <p>【コミュニケーション】 話を聴く、気配り・気づき、会話への参加、アサーション、相手に伝わる話し方(5/14問)</p> <p>【自己理解】 強みの理解、課題の理解、自己開示、自己肯定感(4/10問)</p> <p>【ビジネススキル】 マルチタスク、パソコンスキル、報告・連絡・相談、読解力、判断力、職場への順応性(6/15問)</p>

(2) キャリプロ講座への参加

キャリプロについては、入学後のオリエンテーションの際に全ての入学生へアナウンスをした。当時本人は、「(キャリプロの)話を聞きたいとは思ったが受けたいとまでは思わなかった」と述べていた。その後本人がA事業所でのキャリプロに参加するきっかけとなったのは、1年時の情報処理授業でのつまずきだった。キャリプロでは土曜日を利用して2年時に全3回受講し、コミュニケーションスキル、ビジネスマナー、パソコンスキルなどを学んだ。本人は当時の振り返りから、当初は「勉強に直接関係があるのか」と疑問に感じたようである。しかしプログラムの内容は楽しく、パソコンのレクチャーもわかりやすかったので、「受けてよかった」と感想を述べていた。

(3) オンラインによる学内実習での試行錯誤

コロナ禍により、本学も全学年が学内実習となった。ゼミ単位での指導はSNSや遠隔ツールを用いた指導が必然的に主となる。本人の学習の困難さから事前に“手本”となる資料を筆者が参考になるようにとこみ砕いた内容で作成し、SNSにて提示することを意識した²⁾。その後、遠隔ツールによるテレビ電話機能を用いて指導を進めた。振り返りから本人は「わかりやすかった」と述べていたが、課題の多さとともに、とくに「統合と解釈」の難解さが引き金となり、回避行動が顕著となった。

(4) 三者面談後のB事業所面談へ

三者面談後、本人はスッキリとした表情をしていた。しかし、退学を決めた当時はその後の進路は決まっていなかった。キャリプロ受講の経験があったこと、今後就活で

の困難さも予測されることを懸念し、本人の住所地に近いB事業所を紹介し、帰宅前に出向いてもらった。30分ほどの面談であったが、本人の振り返りから「話を聞いてもらってスッキリした」こと、その後の就活に希望が持てたと述べていた。

【参考文献】

- 1) 稲葉政徳：3年制リハビリテーション専門職養成校における発達障害やその類似特性がある学生に対する支援の課題と考察—臨床実習成就を主眼に置いて—, 岐阜保健短期大学紀要, 8, p. 63-72, 2018
- 2) 障害のある学生の受講を想定した遠隔授業の対応について (ver. 1), 筑波大学ダイバシティアクセシビリティセンター, <https://dac.tsukuba.ac.jp/shien/20200409-1/>, (閲覧日: 2021年8月3日)

【連絡先】

稲葉 政徳
岐阜保健大学短期大学部リハビリテーション学科
e-mail : inaba@gifuhoken.ac.jp